

古文・歴史的仮名遣い

今回の学習のポイント

- ① 「歴史的仮名遣い」とは？
- ② 古語の読みのかまりを理解する

国語監修・執筆

中澤匠吾

「歴史的仮名遣い」とは？

「君待つと 我が恋ひ居れば 我が屋戸の 簾動かし 秋の風吹く」

〈万葉集〉
額田王

番組で取り上げるこの歌を読んでみると、次のようになります。

「きみまつと あがこいおれば わがやどの

すだれうごかし あきのかぜふく」

この歌中の「恋ひ」は、「こい」と読みます。このように、古語の表記と現代の発音（表記）には異なるものがあります。この、現代とは異なる昔の仮名遣いのことを「歴史的仮名遣い」といいます。一方で、私たちが普段使っているのは「現代仮名遣い」です。

■なぜ仮名遣いが異なるのか

初めから表記と発音が違っていたわけではなく、もともとは「恋ひ」を「こひ」と読んでいました。しかし、時代とともに発音が変わってきたことから、表記と実際の発音にズレが生まれたのです。つまりこの場合、「恋ひ」の「ひ」は、現代の「い」の発音に近づいていったということです。

【発展】

右記の歌にある「恋ひ居れば」の「居れば」は、歴史的仮名遣いで表記すると、「をれば」となります（「居り」＝「をり」という動詞）。このように古語では「を」が「興味深い」などの意、「かをり」（「よいにおい」などの意）など、単語の一部にも「を」が使われていました。今では「を」の表記は「本を読む」「ごはんを食べる」などの助詞として用いるのに限られますから、現代仮名遣いでは「おり」「おかし」「かおり」と表記します。「を」「お」の発音上の区別があいまいになり、さらに変化が進むと、百年、二百年先には「本お読む」「ごはんお食べる」と表記するのが当たり前になっていて、「昔は『本を読む』なんて書いていたの

か……」などと勉強しているのかもしれませんが。

古語の読みのきまりを理解する

現代と異なる「歴史的仮名遣い」にはきまりがあります。ここではその表記と読み方のルールを、いくつかおさえておきましょう。

① 語中、語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」表記は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」と読む。
※先に述べた、「恋ひ」↓「こい」がこれにあたります。

〈例〉

- 「思ふ」 ↓ 「おもふ」
- 「あはれ」 ↓ 「あわれ」
- 「いにしへ」 ↓ 「いにしえ」

② 「ゐ・ゑ・を」表記は、「い・え・お」と読む。

〈例〉

- 「まゐる」 ↓ 「まいる」
- 「ゆゑ」 ↓ 「ゆえ」
- 「をり」 ↓ 「おり」

③ 「ぢ・づ」表記は、「じ・ず」と読む。

〈例〉

- 「もみぢ」 ↓ 「もみじ」
- 「いづれ」 ↓ 「いずれ」

④ 「あふ（あう）」「表記を」「おう」「(o)」「(o)」「いふ（いづ）」「表記を」「ゆづ（ゆづ）」「(y)」、

〈例〉

- 「あふぎ（扇）」 ↓ 「おうぎ」
- 「いふなり（優なり）」 ↓ 「ゆふなり」
- 「ゑふ（酔ふ）」 ↓ 「よう」

これにもとづいて、

「か」 ↓ 「かう」 (kō) 「か」 ↓ 「かう」 (sō) 「き」 ↓ 「きゆう」 (kyū) 「じ」 ↓ 「じゅう」 (syū) 「け」 ↓ 「きょう」 (kyō) 「せ」 ↓ 「じょう」 (syō) のように読みます。

【発展】

次の文の読み方を「現代仮名遣い」で表記するとどのようになるでしょうか。

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは少し明かりて

紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

清少納言（「枕草子」第一段より）

↓「はるはあけぼの。ようようしろくなりゆくやまぎわすこしあかりて

むらさきだちたるくものほそくたなびきたる。」

まとめ

言葉は時代とともに変化していきます。表記や発音も、長い歴史の中で徐々に変化し、現代のルールになり、私たちは「現代仮名遣い」にもとづき表記しています。古文の読みを学ぶとき、まったく別の言語を新たに理解するのではなく、今使っている日本語と深くつながりのある表記や読み方を理解するのだということを意識してみてください。現代の言葉を当たり前に使えているように、一定のルールがわかれば古文の読み方もしかりと身につけていくはずですよ。

ただし、前に示したようなルールを丸暗記するばかりでなく、少しずつ実際の古文を「読んでみる」「読み慣れていく」ということが欠かせません。構えずぎず、読む行為を積み重ねていきましょう。そうすることで、例えば「はひふへほ」表記を「わいいうえお」で読むことにも違和感がなくなり、「けふ」は自然と「きょう」と読めるようになっていくと思います。